

## ジャズライフ掲載時の解説

もうここまで来ると、有名とか何とかというレベルではないですね。ジャズという音楽を代表する曲のひとつとも言えます。当然、そんな曲ですからセッションでも頻繁に取り上げられる曲ですが、だからといって簡単だということではないですね。いや、有名なだけにメロディがあまりに印象的で、その分ソロは難しいとも言えます。さあ、ではどう料理しましょうか？

この曲のポイントはなんといっても、Aセクションの3・4小節目に現れるD7ではないかと思えます。このコードの解釈には二通りの考え方があると思えます。まずその1は、その先の6小節目にあるG7へのセカンダリードミナントです。セカンダリードミナントが何かについては、ポピュラー音楽に関するいろんな理論書が出ていますし、あるいはネットで検索しても簡単に見つけれられると思えますので、もし知らないというかたは是非確認しておいてください。この曲のキー・Cにおける本来のドミナントコード・G7に対するセカンダリードミナントなので、このD7のことをダブル・ドミナントと呼んだりもします。それに対してもうひとつの解釈を挙げておきましょう。このD7が2小節目の長きにわたって響いていることから、このD7は、その先のG7とリンクしているのではなく、ひとつのコードとして独立して存在しているのではないかと考えてもいいと思えます。他の例で言えば、これまたセッションでよく演奏される、ジャコ・パストリアスの演奏で有名な「The Chicken」という曲の、9～11小節目に現れるC7です。このように、どこに解決するわけでもなく、単独で存在する7thタイプのコードのことをスペシャル・ファンクション・ドミナントと呼びます。これ、実は結構、いろんな曲に出てくるんですよ。ブルースの17やIV7もそうですし、あるいはセロニアス・モンクの曲なんかにも多いですね。まあ、それはさておき、このD7は単独で存在しているドミナント・コードだと考えることもできるわけです。いずれの場合も、このコードのスケールは一般的にはミクソ・リディアンでいいと思うのですが、この曲の場合は、この部分でのメロディが「G#」の音になっているので、ホールトーン・スケールが当てはまります。全ての音の間隔が全音となっているスケールですね。ということで、今回、ソロを作るに当たって、この部分では全て、そのホールトーンを意識して作ってみました。実際、このホールトーン・スケールが曲中でぴったりあてはまるというのは、数あるスタンダードのなかでも、この曲くらいかも知れません。もちろん、他の曲のドミナント7thコードの時に、どんどんそのスケールを使うことは可能です。このスケールは、全て音が全音の間隔でできているという特異性から、27・28小節目のソロにあるような、システムティックなフレーズを作ることができるので、色々なフレーズを研究してみると面白いかも知れませんね。この曲は、メロディ譜に取り上げた、イントロや2ndリフの部分にもこのホールトーンスケールが重要な要素となっています。デューク・エリントンが、「ホールトーンスケールを使って何か曲を書いてやろう！」と試みてできた曲が、この曲かも知れませんね。いや～、たったそれだけのアイデアで、一体いくら稼いだんだらう？ あっ、お金の話は、この場では御法度！

## 推奨音源

### Echoes Of An Era/Chaka Khan

単なる歌判のアルバムと思うなかれ。まずサポートメンバーが凄い面々。スタンリー・クラークも強力なグループとソロを聞かせてくれます。そのサポート陣に全く

負けていないのがチャカ・カーンのスキヤット。またチック・コリアのホーンアレンジも素晴らしい！ A Train 以外にもおもしろスタンダードが一杯収録されています。

# Take The A Train

Line

C6 D7

1 2 3 4

Half 1 Half

Dm7 G7 C A7 Dm7 G7

5 6 7 8

Half

C6 D7

9 10 11 12

1 2 6 2

Dm7 G7 c Gm7 C7

13 14 15 16

1

FM7

17 18 19 20

Half 1 2 Half

D7 Dm7 G7

21 22 23 24

3 4 3 4 6

21 22 23 24

C6 D7

25 26 27 28

1 3 5

25 26 27 28

Dm7 G7 C G7

29 30 31 32

1 Half

29 30 31 32

# Take The A Train

Solo

The musical score is written for a solo bass line in 4/4 time. It consists of 20 measures, divided into five systems of four measures each. The notation includes a bass staff with notes, rests, and fingerings, and a guitar staff with fret numbers and chord diagrams. Chords are indicated above the staff: C6, D7(#5), Dm7, G7, C, A7, Dm7, G7, C, D7(#5), Dm7, G7, C, Gm7, C7(b9), and FM7. Fingerings are indicated by numbers 1-4 on the bass staff and 1-10 on the guitar staff. Some measures include 'Half' notes. The score is a solo arrangement, meaning it is designed to be played by a single musician on a double bass.

D7 Dm7 G7

21 22 23 24

6 1 Half 1

25 26 27 28

4 9 8 9 7 5 3

29 30 31 32

1 6 4 2 4